

平成 30 年 1 月 29 日

「第 1 回専門委員会指摘事項に対する対応について」のコメント

内山 巖雄

平成 30 年 1 月 30 日開催の第 2 回専門委員会に欠席させていただきますので、上記について、コメントさせていただきます。

1.2 P20 以降：2-2 発がん性以外の健康影響の項目立てについて

これまでの環境基準やガイドラインの評価書に、急性影響、慢性影響の項目とは別に、免疫系への影響、生殖器への影響、発生影響が項目立てされている理由は、生殖器、発生影響が、人の健康影響として、次世代にもつながる重大な影響であること、したがって不確実係数の中の「発がんの他の重大な影響」にあたることから、わかりやすいように項目を分けてきました。

さらに、生殖毒性や、発生毒性、胎児への影響は、曝露が妊娠期間の幅の狭いウインドウ（急性曝露）であっても影響は胎児へ、あるいは次世代へと長期にわたり影響（慢性影響）が認められることから、急性毒性、慢性毒性と分けがたいという理由もあります。免疫系への影響もこの理由にあてはまります。

したがって、私の意見としては、違和感があるかもしれませんが、従来通りの項目立ての方がいいのではないかと考えます。

また、確かに環境基準は慢性曝露影響をもとに作られますが、その物質の毒性を考えるときに、高濃度急性曝露での中毒症状、あるいは LD50、LC50 などの急性毒性を理解した上で、低濃度慢性曝露の影響を考えるのが筋道です（例えば動物実験では、LD50、LC50 を参考にして、慢性曝露実験を行う濃度段階を決めます）

従って、評価書は、やはり、急性影響、慢性影響の順番に記述するのが正しいと思います。

3.8 追加的な文献レビューについて

作業委員会がまとめた文書の主な目的は、IARC が発がん分類をグループ 1 に変更したことにより、環境基準を見直す必要があるかということであったので、特に動物実験は発がんとそのメカニズム、遺伝子障害性に関する文献を中心に記述していると理解しています。しかし、本専門委員会の評価書は、環境基準を作成（見直し）するための評価書なので、発がん以外の影響に関する新たな動物実験結果も主要なものはレビューして、記載するべきものと思います。

以上